

ナミビア学術探検への試み —砂漠の水環境計測と乾燥を生き抜く在来知の習得—



総合人間学部 4 年
山下 耕
ナミビア
2017 年 2 月 26 日～
2017 年 4 月 4 日

渡航概要と内容

アフリカ・ナミビア共和国に 5 名で渡航し、ナミブ砂漠とその周辺に 1 か月滞在して気候調査・生物観察・研究所訪問・徒歩旅行・行政機関との交渉を行った。

渡航前の事前活動としては国内とくに京都大学内でナミビア研究をしている教員を訪問し、調査計画の相談と現地情報の収集を行った。この際、教員らのフィールド調査地や現地研究施設、在留邦人についての情報を得たのでそれを活用した調査計画を準備した。

渡航中は首都ウィントフックに京都大学が設置した「フィールドステーション」を利用し、活動拠点とした。ここでは調理を含めた生活設備、ミーティングスペース、駐車場などが用意されていたためグループでの生活と調査準備が非常にスムーズに行えた。

1 週間弱の準備期間のあとレンタカーを利用してナミビア国内のナミブ砂漠(沿岸部)を中心に 3 週間程度の FW をおこなった。隊員らの野外活動技能が高かったのでキャンプも行いながら気象観測、気象庁訪問とデータ受領、生物観察、ゴバペプの砂漠研究所訪問、3 日間 50km の砂漠徒歩旅行を順調にこなすことができた。

気象観測では乾季の砂漠の厳しい環境のデータを取得、解析した。生物観察では未記載の可能性のある甲虫類を発見した。ほか、徒歩旅行では酷暑のなか熱中症になりながらも隔離された砂漠環境を歩くというたいへん貴重な経験ができた。おもな滞在地域はウォルビスベイ、スワコプムント、ゴバペプであった。

3 名の隊員が 3 月最終週に帰国した後は残った 2 名で調査を続け、南部のキートマンズフープとリュエデリッツの訪問と首都ウィントフックでの環境観光省での許可交渉（現在計画中のナミブ砂漠徒歩縦断に関する国立公園の利用許可の交渉）を行った。当局はここ数年国立公園の利用制限を厳しくしており今回の交渉では許可を得られなかったが、現地在住の日本人の協力を得て今後も交渉を続けていくこととした。

渡航中を通して合計 1 万キロをレンタカーで移動したが大きなトラブルに見舞われるこ

ともなく、多少の体調不良（下痢発熱）こそあったものの全体としては安全で健康な渡航を完了することができた。

渡航を通じて感じたこと

自分のこれまでの海外渡航と大きく異なっていたのは、自ら車を運転して移動しつつ調査をこなすということであった。そういった意味で自律性が求められる渡航だったと感じる。渡航前はレンタカーの予約に関して担当者のあいまいさに気をもむこともあったが、ひとたび現地について見るとインフラやシステムの整備の度合いが非常に高く、ヨーロッパにいたような感覚すら覚えた。そのような理由から移動と調査が予定通りにすすめられたことは快適だった半面、予期せぬトラブルに見舞われながらもコミュニケーションとアイデアによってその場でなんとかしていくという海外渡航の醍醐味(?)を感じることは少なかった。

渡航の大きな目的であったナミブ砂漠の徒歩旅行について、3日間という短い期間ではあったものの無事行えたので大きな達成感があった。自分が長い間あたためている砂漠の徒歩縦断計画において今回の調査は重要な練習であったし、未経験のフィールドと極限的な環境への対処が計画に即する形でできたので、次の段階（学術的な文脈への接合）を目指していきたい。

同時に、その国・地域に特有な景観がもつ固有の価値を発見する楽しさ、具体的には「生命にあふれた砂漠」を存分に体感しFWを通して知見を深められたことも大きな収穫であった。

今回の経験をどのように今後生かしていくか

1. 一度きりの渡航にしない

今回の渡航に際して、ナミビア研究者・現地邦人・行政官などに援助や助言をいただいた。そして、このような「人のつながり」がFW、とりわけ海外でのFWを実りあるものにするということを実感した。研究者を志す身としては、この段階からの継続的な関係の維持自体が非常に重要なものであると考えている。

2. 身体的な経験を学術的に活用する

自分の強みはフィールドでの活動能力と経験値であると考えている。これはフィールド研究者としての「基礎体力」ではあるが、今後求められるのは、いかにそれを学術的に活かしていくかということである。具体的には、関連研究の読み込みと方法論の習得である。

3. 最終目標に向けて

最終目標：砂漠での学術探検に向けてナミブ砂漠や他の砂漠の調査を継続する。また、

フィールドでの生活・調査技能を向上する。これらを統合して自身の目標を達成したい。

主な奨学金の使途

- *渡航費
- *レンタカー及び燃料の頭割り
- *海外旅行保険
- *資料（地図・書籍）購入費 など



写真1 地温の例
ナミブ砂漠の縦走中、地温55.4度を記録した。
気温は48度であった。



写真2 ウェルウィチア
ナミブ砂漠の固有種であるウェルウィチアの観察。最長で2000年程度生存している個体も確認されている。



写真3 凧による空撮
凧にアクションカメラを取り付けて空撮し、最高で200m程度まで到達した。カメラの他にもハンディ気象計を取り付けて気象観測をおこない、垂直分布を分析した。